

資料紹介「おしゃもじ神之記」

資料課 渡辺 真治

はじめに

神奈川県立公文書館寄託、武蔵国橘樹郡北綱島村飯田家文書には「おしゃもじ神之記」と題された資料がある⁽¹⁾。これは、「奉納されたシャモジを持ち帰りそれで飯をよそったり患部にあてがったりすることで、子どもの風邪や百日咳、眼病等に効能がある」⁽²⁾とされる、咳除け信仰のおしゃもじさまについて記されたものである。本稿ではこの「おしゃもじ神之記」について概要を紹介しつつ、おしゃもじさまの信仰についても概観してみたい。

写真と釈文

まずは全文をかかげよう。

写真1



資料紹介「おしやもじ神之記」

釈文

(表紙)
「

●おしやもじ神之記

」

大正十一年九月二十八日金子定吉翁囑^(飯田)菓子折一受^(印)

奉勸請蛇苦止神守護攸(木票)

中川村茅ヶ崎崇敬者中

●俗ニおしやもじ様ト云、

因ニ云、苦痛メクヲ救フ靈妙ノ功德アリ、

咽部ノクツクツトクツメク、俗ニクチメキト云、百日咳ノ一種也、祈願シ成就ノ
トキハ杓子又ハ茶ヲ煎ジテ礼参ヲスル、大キニ御世話、御茶デモ上カレトス

祭神不詳

鎌倉比企ヶ谷妙本寺裡安置

比企氏ノ一族讃岐局、庭前ノ池中ニ入水ス

蛇体トナル、弁財天女ノ靈体多ク水辺ニ祭祀セリ、酌母子神、又杓文字神トモ、

或ハ多賀神ト同体トス、本社ハ近江国犬上郡多賀町ノ鎮座、国幣中社、祭神諾冉
ノ二社也

名物お多賀杓子、お玉トハ誤リナリ

▼蛇苦止神ノ事

(頭注)
「鎌倉」

比企判官能員ハ、建仁三年九月二日北条時政ノ為メニ滅亡、其男能本ノ姉君讃岐局
ハ、庭前ノ池中ニ入テ靈鬼トナル、能本ハ比企大学三郎ト称シ、父亡后旧地ヲ領シ文

章博士タリ、日蓮宗無二ノ信徒ナリ、宗祖ヲ聘シテ姉君ノ靈魂得脱ノ回向ヲ當ム、之レヲ蛇苦止大明神ト崇メ祀ル、比企ヶ谷法華堂ノ始也、之ヨリ長興山妙本寺トシ、日朗上人ヲ開山トス、示来二百年ノ後、当山ノ檀徒佐竹常源入道ハ、管領上杉氏ト戦ヒ、佐竹氏当山ニ楯籠ル、遂ニ利ナク、本堂ノ前ニ切腹シテ死ス、応永二十九年十月三日、上杉方ハ燒草ヲ積テ当山ニ火ヲ放ツ、コノ時池中ヨリ白氣立上リ、震動雷電大雨、コノ黒雲ノ中ニ大象ノ如キ蛇体頭ハレ、紅舌ヲ閃メカシテ伽藍ヲ守護ス、当山什物中、日蓮上人親筆蛇形ノ曼荼羅本尊ヲ有ス、其他略ス

●茅ヶ崎ノ名ハ相州高座郡南湖ニアリ、武州都筑郡茅ヶ崎ハ中川村ニ属ス

(頭注)

「△文政年度ノ旧記ニ因ルナリ」

▲幕府当時旧高三百七十四石三斗五升六合、野々山新之丞知行ト増上寺領、五石一斗ハ正覺寺料也

寺領 百姓代市 十 郎 年寄源 左衛門 名主清 吉

旗本 同 九 左衛門 同 次郎左衛門 同 弥 右衛門

橘樹郡内このおしゃもじ様あり

○木月 ○小机 ○綱島 其他調査中なり

○師岡クマノ社裏

○生麦元宮

全体の構成としてはまず表紙があり(写真1)、本文は大正11(1922)年9月の蛇苦止神の勧請から起筆し、おしゃもじさまの信仰についての概略(写真2)、次いで妙本寺(鎌倉市大町)の蛇苦止明神や多賀大社(滋賀県犬上郡多賀町)との関係を述べ、さらに茅ヶ崎の地名、江戸期の茅ヶ崎村(現横浜市都筑区)の概況、最後に橘樹郡内のおしゃもじ様の分布を記している(写真3・4)。なお行論の都合で先に述べると、以後文中に頻出する蛇苦止神は、その音が杓子ジャクシと似ている事からおしゃもじさま信仰の対象となっているものである。

資料紹介「おしやもじ神之記」

内容の分析

この「おしやもじ神之記」には記名が無いが、綴じ込まれている「大正十一年十月号 附録之一(二十七冊)」の目次(写真5)を見ると「日の丸国旗之原因、附蛇苦止神」となっており、蛇苦止神こと「おしやもじ神之記」が直前に綴じられている史料と一体のものであることが分かる。事実、直前の史料の表題は「日本国旗ノ事歴 附おしやもじ神の略記」である(写真6)。そして「日本国旗ノ事歴」の表紙と末尾にそれぞれ「壬戌季秋日本海山記」・「大正壬戌季秋七十一叟日本海山人記」とあることで、大正壬戌季秋(大正11年9月)に日本海山こと飯田快三(1852～1925)が記したものであることが分かるのである。

飯田快三は嘉永5(1852)年相模国高座郡深見村(現大和市)の真壁以修の三男として誕生。明治6(1873)年に第19大区書記に任命され、のち武蔵国橘樹郡北綱島村(現横浜市港北区)の飯田助太夫(10代目)の養子となり、明治11(1878)年に家督を相続した(11代目助太夫)。北綱島村会議員・神奈川県会議員・橘樹郡会議員を歴任する一方、明治21(1889)年、町村制の施行に伴い北綱島村ほか8ヶ村が合併し大綱村が成立すると初代村長を務めた。また橘樹郡農会長として産業振興にも努めた。長男助夫は政治家、三男九一は俳画家として著名である⁽³⁾。なお海山は俳人でもあった氏の号であるが、実名の「快三」の音に因んだものであるということである⁽⁴⁾。

以下、内容ごとに記事の紹介と検討を行う。

表紙

「おしやもじ神之記」の表題と共に、竹筒と杓文字の挿絵が描かれる。杓文字は「大願成就 願主某氏」と記される所から、咳が治ったお礼として納められたものを示しているのであろう。一方の竹筒は一見すると不審であるが、本文中でも杓文字とならぶお礼の品として挙げられているお茶を奉るためのものであろう。熊原政男「咳神覚書」⁽⁵⁾に横浜市金沢区の一帯でホッキョウ様と呼ばれる咳神に献げられた竹筒についての富岡八幡神社神主佐野明光氏の談として「竹の筒は、報賽の麦酒を入れる容器だということである。この麦酒は今日のビールのことではなく、麦麴で作った甘酒のことで、飲んでみると仲々美味しく、カストリのようだという。」との話が見えている。

このようにおしゃもじさまをはじめとした咳神に竹筒で甘酒やお茶を奉る話は広く見られるところであり、おしゃもじさまへのお礼の品として杓文字と共に描かれたものと考えられる。

蛇苦止神の勧請

本文冒頭で語られるのは大正11(1922)年9月の蛇苦止神の勧請である。やや意味がとりにくい部分があるので順に見ていこう。

まず名前の見えている金子定吉は弘化4(1847)年の生まれ。快三より五歳年長である。明治6(1873)年以降、都筑郡茅ヶ崎村(現横浜市都筑区)の村用掛や代議人総代人をつとめ、明治22(1889)年、町村制施行に伴い茅ヶ崎村ほか5か村が合併して中川村が成立すると、同村の助役や村会議員・学務委員等を歴任した人物である⁽⁶⁾。茅ヶ崎の有力者として多忙を極める中で、神社氏子総代として無格社を合併して指定村社(神饌幣帛料供進指定村社)として確立させるといった活動も行ったようである。

そうした金子定吉翁時に76歳の「嘱」(頼み)により蛇苦止神の勧請が行われたと読み取れる。菓子折を贈られている事から快三はそれに協力したもので、中川村茅ヶ崎崇敬者中とある所から、勧請先は定吉の地元である中川村茅ヶ崎の地であったのだろう⁽⁷⁾。

ではこの蛇苦止神はどこから勧請されたものであろうか。若干の手がかりをもとに推測してみたい。

蛇苦止神として横浜近郊で最も著名なのは鎌倉の日蓮宗長興山妙本寺の蛇苦止明神である。現在も妙本寺の境内、方丈門の前を左手に進み石段を昇った先に蛇苦止堂として祀られ、妙本寺の鎮守とされている。しかしこれでは快三が協力者として立ち現れる意味が不明瞭である。

そこで再度近郊で蛇苦止神を探してみると、港北区小机町の日蓮宗長秀山本法寺にやはり蛇苦止明神が祀られている。『新編武蔵風土記稿』岸根村の項に

○蛇骨神社<北方の田間村境にあり、相伝ふ篠原村の内小名蛇袋といへる所にて蛇を殺し、持来りてここへ埋め、その跡へ此祠を建たりと、又の伝へに当村開闢のをり弓を射て矢の落たる処を村境とせんと射たりけるに、此処へ矢の落たれば

資料紹介「おしゃもじ神之記」

爰へこの祠を造れりとも云、是もうけがたきことなり、>
とあり、「城郷村誌」史跡の項⁽⁸⁾に

蛇苦止明神の跡(岸根町)

「蛇苦止明神」或は「蛇骨神社」と呼ぶ名は余りに人に知ら居られぬも、一本杉と呼べは何人もあの三隅耕地の中央、篠原町と境を接する杉山神社の下方に立つ、一本の鉾の雷枯れし老杉とうなづかれるであろう。現在は祠もなけれども明治初年まではその杉の根元に一小祠あり、蛇苦止明神と呼びなされて当時は参詣者夥しく、これを聞き知りし本法寺の先住はこれを請ひて自山に遷せり。今は有りや否や、由来として伝ふるに三説あり。

一説には往昔篠原村の蛇袋なる地に大蛇が住み居て附近の作物や人畜に危害を与へたので、村民は大挙し大蛇を退治なし、それを現在の一本杉の所にて焼き、後の崇りを恐れる心より祠を建て神に祭つたと言ふ(篠原の蛇袋の称は蛇が住んで居たからか)(後略)

と見えている。この蛇骨神社＝蛇苦止明神が現在本法寺境内の祖師堂に安置されているおしゃもじさまと考えられる。本法寺のおしゃもじさまは高さ30cmほどの女神の像である⁽⁹⁾。

実はこの本法寺は飯田家の檀家寺で、もともと綱島の地に創建され、のちに小机の現在の地に移転したという由緒を持つ。境内には先にも述べた快三の子で俳画家の飯田九一の俳画塚や飯田家の人々の句碑もあるなど、飯田家と非常に縁が深い。蛇苦止神の勧請に際して快三が仲介をする対象としていかにも相応しいように思われる。

以上、推定の域を出ないものの、当史料に見える蛇苦止神は本法寺のものを茅ヶ崎へと勧請したと考えたい⁽¹⁰⁾。

おしゃもじさまの信仰

続いて書かれているのはおしゃもじ様の信仰についてである。百日咳の古称であるクチメキについて言及されているが、おしゃもじさまは咳が出る病気全般の中でも特に百日咳との関係が深いようである。現在ほど医療の恩恵に預かれなかった時代、幼児が多く罹患した百日咳快癒の祈りがおしゃもじさまには捧げられたのであろう。

そして祈願が成就し咳が治まった際には杓子またはお茶を煎じてお礼参りをする。「大キニ御世話、御茶デモ上カレ、(大変お世話になりました、お茶でも召し上がってください)」というのはおしゃもじさまの信仰でよく見られるフレーズである。

1本お借りして2本にして返す記述こそ無いものの、おしゃもじさま信仰の典型的な姿が紹介されていると言える。

蛇苦止と杓文字

続いておしゃもじさまと蛇苦止明神・多賀大社との関係が記される。

まずは比企一族の讃岐局(比企能員の娘で将軍源頼家の妻)が入水自殺し蛇体となるという妙本寺の蛇苦止明神の由来がごく簡潔に述べられる。これについては後の部分でより詳細に説明されるのだが、次いで弁才天が多く水辺に祭祀されるとの一文が見える。ここで突然弁才天の話になるのは一見すると奇妙であるが、中世以降弁才天は蛇神である宇賀神と習合し、頭上に翁面で蛇体の宇賀神を乗せた宇賀弁才天として表現されるようになる。また弁才天のルーツであるヒンドゥー教の女神であるサラスヴァティーは、聖なる河とその化身であり水の女神である。弁才天が入水し蛇体となった蛇苦止神と非常に近いイメージを持っているところからの連想と言えよう。またおしゃもじさまについて「酌母子神」・「杓文字神」の当て字も披露されている。

更には多賀神と同体との説も紹介する。これは多賀大社の名物が杓子(通称お多賀杓子)である所からの発想であろう。

妙本寺蛇苦止明神縁起

続いて「鎌倉」と朱の頭注が付され、妙本寺の蛇苦止明神の由来がより詳細に記される。現在の妙本寺の地に邸を構えていた鎌倉幕府の御家人比企能員は、建仁3(1203)年北条時政により滅ぼされた⁽¹¹⁾。能員の子の能本は大学三郎と名乗って文章博士となり、日蓮宗の信徒となった。能本の姉の讃岐局は、庭前の池で入水自殺し霊鬼となっていた。そこで能本は宗祖日蓮を招聘し、讃岐局の霊魂得脱の回向を営み、蛇苦止大明神として祀った、とする。

比企能員の滅亡は、源頼朝亡き後二代将軍となった頼家のめのと(養育者)兼岳父と

資料紹介「おしやもじ神之記」

して権力を伸ばした能員と、頼家の弟で三代将軍となる実朝のめいどである北条氏との勢力争いが、頼家の病臥を機に暴発したものであるが、ここでの遺恨が後述する北条政村(時政の孫)の娘への讃岐局の祟りへと繋がっていくのである。

以上の記述は妙本寺の蛇苦止明神の由来をそのまま引用したのと言ってよいが、その元となっているのが『吾妻鏡』文応元(1260)年10月15日、11月26日条である⁽¹²⁾。
すなわち

北条政村の娘が邪気を煩い、今夕ひどく悩乱した。これは比企能員の娘の讃岐局の祟りであると、(讃岐局が)自ら告げた。讃岐局は大蛇となり、頭には大きな角が生え、炎のような苦を常に受けており、現在は比企ヶ谷の土の中にいると告げたという。これを聞いた人々は皆身の毛がよだったという。(10月15日条)

北条政村の娘が邪気に悩まされており、比企能員の娘の霊託に基づきその苦患を除くために経の供養が行われた。鶴岡の別当である隆弁が唱導を行ったが、その説法の最中に政村の娘は悩乱し、舌を出して唇を舐め、身を蠢かして足を延ばした。恰も蛇が出現したかのようにであった。能員の娘が聴聞のために来臨したためだという。隆弁の加持が済むと、政村の娘は呆然として言葉を発するのを止め、眠るように本復した。(11月26日条)

といったものである。ここで見えている能員娘(讃岐局)の政村娘への祟り、蛇身化、供養による回向が蛇苦止明神の信仰へと繋がっていく。

続いて話はそれからおよそ200年後、室町時代に移る。妙本寺の檀徒であった佐竹常源入道が管領上杉氏と戦い、寺に立て籠もるも本堂の前で切腹して果てた。応永29(1422)年10月3日、上杉軍は寺に火を放とうとしたが、この時に池の中から白い雲気が立ち上り、大地は震え雷電が轟き大雨が降り出した。この黒雲の中に大象のような蛇が現れ、赤い舌を閃かして伽藍を守護した。寺の什物に日蓮上人親筆の蛇形の曼荼羅がある、との逸話が語られる。

こちらにもまた史実に蛇苦止神の信仰を付与した話となっている。『鎌倉大草紙』⁽¹³⁾に

応永29年10月3日、佐竹上総入道(山入与義)が家督の事に関して(関東公方足利持氏の)御不審を蒙り、比企ヶ谷に逼塞していたところ、(持氏は)上杉憲直に命じ

て軍を向けられ、佐竹も打って出て防戦するも叶わず、法華堂で自害して果てた。その靈魂が祟りをなしたので一社の神に祀った。

とある。この事件は佐竹義盛の死後における関東管領山内上杉氏から迎えた養子の義人と、一族の有力者で京都御扶持衆であった山入与義の対立に、京都の将軍への対抗を強める関東公方足利持氏が介入し与義討伐に動いたものである⁽¹⁴⁾。妙本寺のある比企ヶ谷と山一つ隔てた大町の日蓮宗多福山大宝寺の地は佐竹氏の屋敷跡とされており、鎌倉でも日蓮宗寺院の密集する一帯で物語が展開している。なお妙本寺境内の新釈迦堂跡には佐竹やぐらと呼ばれる遺構が残っており、与義主従が自害した場所とされている。

茅ヶ崎地名考

続いては茅ヶ崎の地名に関する考証である。茅ヶ崎の地名は相模国高座郡南湖（現茅ヶ崎市）に見え、武蔵国都筑郡の茅ヶ崎は中川村に属しているとする。或いは両茅ヶ崎の間に共通するものを見出そうとしたのであろうか。また先述した通り中川という村名は、明治22(1889)年に町村制施行に伴い茅ヶ崎村ほか5か村が合併して出来た比較的新しいものであった。快三にとっては茅ヶ崎の方が馴染み深いものであったのかも知れない。

江戸期の茅ヶ崎村

さらに記述は「文政年度ノ旧記ニ因ルナリ」との頭注が付された江戸時代の茅ヶ崎村の概況に続く。「文政年度ノ旧記」は年代から推察すると『新編武蔵風土記稿』編纂の為に村々が提出した地誌取調書上あたりであろうか。これによると茅ヶ崎村は旧石高が374石3斗5升6合、野々山氏知行分と増上寺(東京都港区)領と正覚寺(横浜市区)料とあり、寺領分と旗本領分の村方三役の名がそれぞれ記されている。なお他の史料に見える茅ヶ崎村の石高は表1の通りである。

表1 茅ヶ崎村石高

武蔵田園簿	369石
元禄郷帳	374石
天保郷帳	374石
旧高旧領取調帳	515石

資料紹介「おしゃもじ神之記」

橘樹郡のおしゃもじさまの分布

最後に話題は再びおしゃもじさまへ戻り、橘樹郡内のおしゃもじさまの分布が記される。列举されているのは木月(現川崎市中原区)、小机(現横浜市港北区)、綱島(同)、師岡(同)、生麦(現横浜市鶴見区)の5ヶ所である。このうち師岡と生麦は「其他調査中なり」の後に改行して書かれており、墨色も異なることから後日追記されたものと考えられる。

おしゃもじさまと蛇苦止、水縄、蛇

おしゃもじさまについては従来、『野乃舎随筆』⁽¹⁵⁾に見られるような石神信仰に由来するとする説と、諏訪大社系の社宮司社しゃぐうじしゃに由来するといった説が主に語られるところである。そうした中で蛇苦止神に由来するものは付随的な扱いになっている。しかし鎌倉周辺(及び日蓮宗関係か)のおしゃもじさまについては、蛇苦止神をキーワードに整理してみる必要があるように思われる。

また一方で、「江戸時代に検地に用いた水縄みずなわを埋めた」とされるおしゃもじさまや、退治した蛇を埋めたとするおしゃもじさまが散見される。蛇苦止神をはじめとして、おしゃもじさまと蛇に関する信仰は近いものがあるようである。縄と蛇の形の類似性や、蛇の異称である「口縄くちなわ」、蛇に似た想像上の動物である蛟みずちなども考慮に入れてみる必要があるだろうか。

医療の発達によりその役割を終えつつあるとも言えるかも知れないおしゃもじさまであるが、その背景にはなお、色々と興味を惹かれるものがあるのである。

まとめにかえて

「おしゃもじ神之記」の紹介を中心に、おしゃもじさまの信仰についても概観した。改めて当史料を見返して感じるのは、記主である飯田快三の郷土へのまなざしともいうべきものである。飯田家は地方名望家⁽¹⁶⁾であり、大綱村長や神奈川県議、橘樹郡農会長等を歴任した快三の人生は、まさに名望家としてのものと言い得よう。そうした快三の手によるこの「おしゃもじ神之記」は、単におしゃもじさまの信仰について記すのみならず、茅ヶ崎の地の来歴や妙本寺の由来にも注意が払われている。こ

うした背景には大正9(1920)年からの『横浜市史稿』の編纂等による郷土史への意識の高まりが指摘出来るだろうが、それ以上に快三の郷土への愛着のようなものを感じるのである。

本稿執筆時(令和3(2021)年2月)、新型コロナウイルスの感染拡大により神奈川県は緊急事態宣言の発出下にある。咳除け信仰のおしやもじさまに関するこの小文を、コロナ禍終息への祈りとしていたい。

追記 本稿は第9回神奈川県立図書館・公文書館合同展示「パンデミックを生き抜くために—神奈川と感染症の歴史—」(令和3年2月2日～3月31日、WEB上にて開催)の準備に際して得た知見を中心にまとめたものである。「おしやもじ神之記」の上記展示での利用および本稿への掲載について御快諾いただいた寄託者の飯田助知氏に末筆ながら記してお礼申し上げます。

【注】

- (1) 「大正十一年十月号附録之一(二十七冊)」(資料ID 2200710342 大正期の部 No. 338)所収。
- (2) 羽毛田智幸「横浜市域の産育習俗に関する民間信仰の調査研究」(『横浜市歴史博物館調査研究報告』10 横浜市ふるさと歴史財団 平成26年)。
- (3) 以上の飯田快三の経歴は『神奈川県史』別編1人物(神奈川県 昭和58年)による。
- (4) 寄託者 飯田助知氏の御教示による。なお、「おしやもじ神之記」が記されるおよそひと月前にあたる大正11(1922)年8月21日、「生麦事変六旬年祭」が挙行され快三も参列している。その際、臨席した英国総領事ホルムスから快三は記念の書を求められ、かつ俳号に日本の字を冠するように求められたという。故に従来の海山に日本の2字を冠して日本海山と号することとした旨が飯田家文書の「大正十一年九月号(二十五号)」(資料ID 2200710321 大正期の部 No. 317)に収められた「日本海山ノ号」にて語られている。
- (5) 『かながわ文化財』7(神奈川県文化財協会 昭和31年)

資料紹介「おしゃもじ神之記」

- (6) 「昭和6年 徳行者事績調」(当館所蔵歴史的公文書 資料ID 1199404962 県各課 1-2-50)
- (7) 都筑中央公園に近接する茅ヶ崎中央60 - 23地点に咳の神とも称されるおしゃもじさまが現存する。以前は荏田寄りの茅ヶ崎2255番地にあったというこのおしゃもじさまこそ、「おしゃもじ神之記」に記された大正11年に茅ヶ崎に勧請された蛇苦止神ではないかと考えている。しかし茅ヶ崎のおしゃもじさまは堂内に掲げられたお札も「杓子大神」であり、以前掲げられていた解説(阿山克夫「小祠の神々と堂庵の仏たち」14(『かながわ風土記』259号)からの引用)も「咳の神 社宮司社 通称おしゃもじさま」であったようで蛇苦止神の気配は全く感じられない。なお検討を要する。
- (8) 『横浜市港北区皇国地誌附四村四誌』(横浜市港北図書館 昭和59年)
- (9) 『鶴見川流域のくらし 生業・水運・信仰』(横浜市歴史博物館 平成27年)の48頁にカラー写真が掲載されている。また蛇骨神社=蛇苦止神社は、近年地元の有志により新横浜1-4-7地点に「蛇幸都神社」として再興されている。
- (10) なお本法寺の蛇苦止明神もそのルーツは妙本寺の蛇苦止明神であろうことは想像に難くない。
- (11) 事件の概略を記す『保暦間記』の記事を掲げる。

(前略)建仁三年七月二十一日、頼家く左衛門督、歳二十二、病ヲ受ケキ。此人、多ク死霊ノ故ニヤ、大方人望ニモ背ケルカ、病氣次第ニ難儀ノ間、八月二十七日、遺跡ヲ長子く一幡君く譲リ、坂ヨリ西三十八箇国、舎弟く千幡君く譲ラレ畢ヌ、爰比企判官藤原能員く一幡君六歳外祖、遠江守時政く千幡君十歳外祖くヲ討、天下ノ世務ヲ一人シテ相計ハントスル。此事聞ヘテ、九月二日、能員ヲ時政ノ宿所ヘタハカリヨセテ、能員ヲ差殺畢。同六日、一幡君并能員子息宗朝以下、御所ニ籠テ合戦ス。義時、義村、朝政等ヲ以テ大将トシテ、数万騎ノ軍兵ヲ差遣シテ、能員一族悉打ハタシ畢。剩、一幡御前サヘ、御所ニ火ヲ懸ケレハ、ヤキ死給フ。是ヲ小御所戦ト申ス。同七日、頼家出家セラル、同十七日、千幡御前元服セラル。号実朝。同二十二日、仁田四郎忠常く一幡御前乳母、誅セラレ畢。同二十七日、実朝く十二歳ニシテ、征夷將軍ノ宣旨ヲ蒙ル。爰ニ、頼

家、少駿ヲ得、能員ヲコソ打レメ、目ノ前ニテー幡ヲサヘ打レヌル事無念也トテ、時政ヲ討ツヘシトテ、諸人ヲ召ス処ニ、同二十九日、伊豆国修禅寺へ移奉リヌ。然間、時政、将軍ノ執権トシテ天下ノ事執行フ。頼家、猶謀叛ノ聞ヘ有ケレハ、次年〈元久元年〉七月十九日ニ、三十三歳ニシテ修禅寺ノ浴室ノ内ニテ討レ玉フ。(後略)

(12) 『吾妻鏡』 文応元(1260)年10月15日条

十五日、己酉、相州〈政村〉息女煩邪氣、今夕殊悩乱、為比企判官女讃岐局靈崇之由、及自詫云々、件局為大蛇、頂有大角、如火炎、常受苦、当時在比企谷土中之由發言、聞之人豎身毛云々、

同年11月26日条

二十六日、己丑、晴、(中略)

今日相州政村被頓写一日経、是息女悩邪氣、依比企判官能員女子靈託、為資彼苦患也、入夜有供養之儀、請若宮別当僧正為唱導、說法最中、件姫君悩乱、出舌舐唇、動身延足、偏似蛇身之令出現、為聴聞靈氣来臨之由云々、僧正令加持之後、惘然而止言、如眠而復本云々、

(13) 『鎌倉大草紙』

(前略)一、応永二十九年十月三日佐竹上総入道家督の事に付て御不審を蒙り比企谷有けるを、上総淡路守憲直に被仰付発向しければ、佐竹も打て出防戦ひけるが終に不叶、法華堂にて自害して死ぬ、其靈魂崇をなしける間、一社の神に祭りける、(後略)

なお事件の日付は正しくは閏十月三日である。

(14) 今井雅晴「鎌倉の佐竹氏」(『三浦古文化』48 三浦古文化研究会 平成2年)

(15) 『野乃舎随筆』 咳神

葛飾の亀戸村に、オシヤモジといふ神の祠有、神前に杓子を夥しくつめり、依て其故よしを、土人に問けるに、咳病を煩ふ人、此神に願たてぬれば、さはやぐ事すみやかなり、此故に、報賽に杓子を奉納するといへり、あまりに異なる、神の御名なれば、又其後祭神を、其さとの古老に問ひけるに、石凝姥の神なりといへり、石凝姥は、神代卷天石窟段に、以石凝姥為冶工採天香山之金以作日

資料紹介「おしやもじ神之記」

矛と有て、さらに咳嗽によしなし、されど按るに、石凝姥を石神ともいふべければ、咳神とはやくより、土人のおもひあやまりて、咳病の神と心得たるなるべし、又石神を、音にてシヤクジンともいへば、杓子によしある故、報賽に杓文字を奉納することとはなりけん、板橋の辺にも、石神井といふ処有、是も石神のおはします故の地名といへり、神は正直を御心とし給へば、人の願によりて咳病をも退けたまふなるべし、

- (16) 地方政治を担った有力者で、多くが江戸時代以来の名主等の由緒と経済力を持ち、地域社会に対する社会的行為により住民からの名望を得ていた人物。明治21(1888)年制定の「市制・町村制」制定理由書中の「名望家」による呼称。